

悪戯

屋根裏

成都が平定されて、世の中がようやく少し落ち着きを見せ始めた頃の事。

花をこの世界に導いた九天九地盤は、花がこの世界で生きていくと決めた途端、不思議な事に光と共に溶けるように消えていった。それを玄德と二人で見守ったのも、もう大分前の事だ。

それから、しばらく玄德と花の間で色々な出来事もあったが、それこそようやく婚儀を挙げる事が出来た。

玄德の妻となった後も、以前と変わらず孔明の元で弟子として孔明を手伝う毎日だった。

自分にも出来る事があるならと思つて、続けている事ではあつたが、果たして本当に助けになれているのかは、花には分からなかつた。

「こんにちは。師匠から書簡を預かつてきたんですけど、玄德さんはいますか？」

「これは軍師様」

まだ、玄德の妻となつて日が浅いせいか、花の事を軍師様と呼ぶ兵は多い。その度に、本も無くなり、出来る事が少なくなつた事を思い知らされるようで、花の胸は少しだけ痛んだ。

それでも、本を使わなければならぬような戦が無くなつた事を喜ぶべきだろうか。もう大切な人が傷つくような、そんな戦はごめんだ。

そうは言つても、この世の中から戦が無くなると言う事は無いのだろうか。

花の姿を認めた衛士の兵は、一瞬表情を綻ばせた後ですまなそうな顔をした。

「ただいま、玄德様は所用で席を外していらっしやいます。せつかく来ていただいたのに申し訳ないのですが」

「そうですか……」

花はしゅんと肩を落とした。

晴れて玄德の妻になれた筈なのに、こうして仕事中は姿を見られない事の方が実は多い。

かろうじて、結婚前と違うのは邸に戻る時に玄德と一緒に帰れる事位か。それだつて、玄德に来客があつたり軍議があつたりすれば、叶わない事も多い。

だから、孔明から書簡を言付けられて、仕事中に堂々と会いに行ける事が素直に嬉しかったのだけれども。

花が今持っている書簡は、玄德に直接見て貰つて早急に決済して貰う必要のある物で。

孔明から「すぐに見て貰つて、ちゃんと返事を貰つてきてよ」と釘を刺されている位だ。けれども、この部屋の主がいけないのでは仕方がない。一度出直そうと思つて、踵を返すと「お待ち下さい」の声に引き留められた。

「このまま軍師様を帰してしまつては、私が怒られてしまいます。玄德様もすぐにお戻りになるでしょうから、中でお待ちになつては如何ですか」

「え、でも今、玄德さんはいないんですよね」

そんな勝手に入つて良いものだろうかという気もするが、待つていたらどうです？の誘惑にも正直抗いがたい。

「軍師様でしたら、構わないでしょう」

「えっと、そのありがとうございます」

さあさあと、扉を開けられて中に入るよう促される。

玄德と花が婚儀を挙げてから、皆玄德の忙しさを知っているせいか、こんな風に周りの者が妙に気を利かせてくれ